

の活性化につなげようと、インターネットによる公有財産の売却を行った。出品した4校のうち1校の売却が決定し、年内にも再利用が始まる予定だ。残り3校については今回の入札はなかったが、現地視察や問い合わせなど次へつなげるきっかけができた。この機会を生かして学校跡施設を再利用し、学校が存在していた時のような賑わいを取り戻し、「地域の元気」につなげていきたいとのことであった。

- ・売却施設 旧太陽小学校
- ・利用目的 美術館
- ・落札価格 3千万円

## 北海道町村議会議員研修会

青田 良一

開催地 札幌市

開催日 6月30日

講演 「住民自治時代の議会の役割と課題」

講師 山梨学院大学法学部教授 江藤 俊昭氏

先生は地方制度調査委員として平成の合併に関与した。

地方制度調査委員会による平成の合併を総括すると、大合併はかなり無理をして進んだ。これ以上は無理ではないか。ここで一区切りつけ、更なる連携の在り方を探っていくことになった。併せて、自民党・民主党が基礎自治体の数をどう考えるかをみていかなければならない。

地方分権改革について、知事をはじめとする首長の連合体がマスコミアピールをしているが、地方議会人はどのような考えを持っているのかよく見えない。だから、地方自治を担っているのは首長ではないかと住民は思っている。自治の根幹にかかわることこそ、議会が軸となっていくことが大事なのだ。



## 北海道町村議会議員研修会

山田 秀明

講演 「どうなる日本の政治と経済」

講師 読売新聞特別編集委員 橋本 五郎氏

衆議院の解散を前に、長年に亘り政治記者として取材した経験を生かし、構造改革の痛みや麻生総理誕生までの秘話をユニークに語った。

その中で心に残ったのは、自殺者の数が増え続けているが、多くの人が自ら命を絶つというの最低の政治だと思う。また、福祉とは箱物を作ることではなく心である。本当は何が大切かを政治家は考えなくてはいけない。政治の基本は家族への愛だ、と力強く訴えていた。

終わりは母の話となり、自分や兄弟を育て、子ども達が都会に出て行つてから80歳で亡くなるまでの30年間、秋田県内の町で一人暮らしをしていた母の教えについて涙ながらに話し、胸を熱くさせた。教え「いかなる時も手を抜くな、傲慢（ごうまん）になる

な、常に謙虚であれ」は、今でも自分の中に生き続け、実践しているとのことであった。

## 中空知ふるさと市町村圏議員交流会

笹木 正文

本年度の中空知市町村圏組合研修が7月9日に歌志内市で開催された。

講師に頼りクルトじやらんりサーチセンターのヒロ中田氏を迎え、「食が地域を熱くする」という演題にて、食による地域の活性化の手法についての講演会が行われた。現在、我が町でも農産物のブランド化に取り組んでいる中で、非常に興味ある内容であった。

まず、北海道における観光の必要性が説かれ、定住人口減少の対策として交流人口の増加を挙げ、観光振興こそが裾野の広い総合交流産業であると位置づけた。その観光の中でも、温泉や遊園地は設備に対するコスト面や立地に左右され、中空知に多い加熱が必要な冷泉や観光集積地以外

の遊戯施設は永続性に疑問がある。

それに対して、「食」は最大のリピートコンテンツで、満足度（実現度／期待度）が高くリピーターを多く確保することができ、やる気になれば短時間&低コストで開発も可能であるとしている。

ヒロ中田氏は、交流人口増加の切り札として『新・ご当地グルメ』を打ち出している。現在までの「ご当地グルメ」は自然定着型なのに対し、『新・ご当地グルメ』は企画開発型としている。

『新・ご当地グルメ』の特徴を挙げると、「地産地消を前提とする」「通年で提供できる」「複数の場所で提供可能」「昼食をターゲットにする」「民間主体で開発」「開発メンバーに女性や若者が参加」「広い消費世代を対象にする」などである。

成功事例の中では、南富良野町の「なんぶエゾカツカレー」の誕生経緯で、開発期間1年、必要経費300万円程度という内容にもかかわらず、有害鳥獣に指定されたエゾシカと地場産品を使い、町のPRと地元経済振興の双方を兼ね